いじめの根源とその対策

遠　藤　秀　夫　　塹　江　光　子

Roots of *Ijime* and Its Preventive Measures

Hideo Endo and Mitsuko Horie

Summary

This is a study on the problem of *ijime* (bullying or a group attack on an individual) in schools, which has become one of the most serious social problems in Japan. After making a survey of the second-year students in junior high school (8 th graders), the causes of the problem were investigated with a view to suggesting possible preventive measures.

From a pedagogical point of view, the roots of *ijime* lie in the developmental stage of the child. The survey has revealed that most children today have no specific objectives in life, have a weak will and little sense of justice, and are extremely self-centered. These seem to be the factors leading the student to easily join in a group attack on a particular individual purely on the basis of personal likes and dislikes of the victim. In this case, the aim of education should be to bring up the child with stronger will and mind.

Another explanation of *ijime* is that it is a way of giving vent to the accumulated frustration of the child. At school the work is extremely overloaded. At home parents tend to interfere in the child's own affairs beyond tolerance as the result of overprotectiveness.

Based on these observations, specific measures are suggested as to how education should be both at school and at home by taking some of the social problems into consideration.

Received April 30, 1986

要　　約

この研究は，今，大きな社会問題にまで拡大している「いじめの問題」について，中学生を対象にして，学校教育，家庭教育といった面から，その根源を探ね，これに対する対策を考察したものである。

その結果，次のことが明らかにされた。

第1に，今の子ども（中学生）は生活の目標も現実的で理想に乏しい。意志も弱く，正義感や順法

の精神も薄い。我意や甘えが目立っている。このことが，個人的な好嫌で，しかも深い理由もなく容易にいじめに参加し，しかも，弱者に対して，歯止めが利かないまでに拡大する因となっている。

第2に，直接的な動機は，うっぷんを晴らすことに中心があるが，うっぷんの最大のものは教科の理解が困難であること。家庭においては，満足な状態にありながらも，親の過大な期待感から，命令的，干渉的態度で接しられていること。教師の指導態度にも，学校毎に差はあるが，改善すべき余地が多分にあること等が挙げられる。

教育対策については，戦後教育の反省に立って，民主主義教育のあるべき姿を考察し，家庭教育に対しても，親の理解ある態度を強調した。また，社会的影響を無視して教育は考えられないので，社会的影響に対する対策も附帯的に言及した。

目　　次

研究の目的と分担
第一部　いじめの根源　―生徒調査から―
一．生徒調査の実施
二．調査結果の信頼度に対する見解
三．調査問題
四．調査結果について
1．調査結果の全容
2．調査結果の解釈
(1)　いじめはどうして起るか
(2)　うっぷんの原因は何か
(3)　体罰と生徒の暴力的傾向の関係
(4)　家庭生活のうっぷんの状態は
(5)　意志の力や耐性の状態は
(6)　正義感の状態は
(7)　市民の義務としての順法の態度は
(8)　生活の目標は
(9)　教師と生徒との信頼関係は
3．いじめの根源に対する解釈
第二部　中学生の親子関係と欲求不満
一．目的と調査期，調査問題
二．調査結果
三．結果の考察
第三部　いじめの克服に対する教育対策
一．戦後教育の反省
二．具体的教育対策
1．学校教育改善のために
(1)　教育内容について
(2)　教育方法に関して
2．家庭教育改善のために
3．社会的影響に対して
三．むすび

研究の目的と分担

教育学は実践の学である。現在の教育問題を明確に捉え，それを解決するために，何程かの貢献が出来なくては，教育学の意義はない。まして，教員養成を目的とする本学に於ては，現在の教育問題に無関心であることは許されない。

この意味から，現在の最大の教育問題である「いじめ」について教育的にその根源を究め，その解決のため何程かの寄与をするとともに，本学生のこの問題に対する関心と意欲をどうしても高めたい。われわれの本研究の目的や動機はまさにここにある。

しかして，この研究は三部から成っている。第一部はいじめの根源を究めるための生徒調査である。ここにおいて，今日のいじめは何に由来するかを教育という面から究明しようとした。第二部は子どもの育った家庭環境，その中の親子関係を明らかにしようとした。どんな育て方によって成長して来たかである。そして，両者を一体的なものとして根源をまとめ，その上に立って対策を考えようとしたのが第三部である。しかして，緊密な連絡を保ちながらも，第一部は主として遠藤が，第二部は塹江が担当し，第三部は両者の協議の上に，遠藤が主としてまとめたものである。(一部　塹江)。

第一部　いじめの根源　―生徒調査から―

一. 生徒調査の実施

処方箋を書くためには病状を正確に捉えなくてはならない。そのために，今，いじめが最も深刻になっている中学生の実態を捉えようとした。調査能力に限界があるが，とにかく研究に必要な最低の生徒数の確保とその分布に心掛けた。

このようにして実施したのが，中学２年生，学校数７校，各学校一学級，男子145人，女子154人，計299人である。他にクラブの生徒小学４年から高校２年まで18名，ただし，この18名は統計には入れず参考資料とした。なお，後半の調査問題の解答には，生徒数に多少の変動がある。

調査時期は昭和60年11月中旬から12月初旬まで。中学２年生を対象にしたのは，この学年は，心理的に動揺期ではあるが，中学校生活の最盛時であり，かつ，いじめも多く中学校に発生しているからである。

二. 調査結果の信頼度に対する見解

調査は全県や全国に亘るのがよいことに違いないが，７校，300名に及ぶ結果は，これまでの数ある経験から，全国的な動向と大差のないことが実証されている。しかも，この７校は，岐阜中心部と農村に分配しているし，私学をも包含させているので，一応は信頼出来ると思う。また，７校に共通している傾向と学校毎に違った結果を見せているのを見ると，そこに自ら一般原理の生れてくることも了解出来る。

三. 調査問題

調査問題は，生活の目標，性格，家庭生活，学校生活に亘り，いじめの原因が自然に浮び上って来るように考えてみた。調査に御協力いただいた各学校に，深く，深く感謝したい。

次に調査の全問題を掲げたい。

生　徒　調　査

男・女（一方を○でかこむ）

岐阜教育大学教育研究会
責任者　遠　藤　秀　夫

この調査は，お互いの考え方を知って，今後自分達がよりよく成長できるようになるために行なわれるものです。それで，ありのままを素直に書いてください。次に幾つかの項目がありますからそれぞれについて，自分の考えに合うものの符号を一つだけ○で囲んで下さい。また，その他の欄には，自由にかき込んで下さい。

一. 将来の目標について

1. 今，あなたが一番熱心になっていることは，次のうちどれですか。(一つだけ選ぶ)
イ. クラブ活動・部活動。
ロ. 生徒会活動。
ハ. 高校入試に備えている。
ニ. すぐれた立派な人になりたいと努めている。
ホ. 別に，これといったものはない。
ヘ. その他。

2. 将来どんな人間になりたいと思っていますか。(一つだけ選ぶ)
イ. 家族のことを第一に考えられる人に。
ロ. 豊かな趣味をもった人に。
ハ. 経済的に豊かな生活のできる人に。
ニ. 社会のために役立つ人に。
ホ. 新しいことを発明する人に。
ヘ. 別に，これといったことを考えていない。
ト. その他。

二. 性格について（自分の性格を振り返って，一つだけ）

1. 一度決心したことは
イ. 最後までやりぬくたち。
ロ. 途中でくじけるたち。
ハ. 決心などしないたち。
ニ. その他。

2. 少し無理と思っても欲しいと思う品がある時は
イ. どうしても手に入れたい。
ロ. 代わりのものでがまんする。
ハ. 時期を待って手に入れる。
ハ. あきらめる。
ヘ. その他。

3. 思うようにならないことがある時は
イ. すぐかんしゃくを起こす。
ロ. こらえる。
ハ. すぐあきらめる。
ニ. 思うようになるよう工夫する。
ホ. 何時までも時期を待つ。
ヘ. その他。

4. みんなと意見が合わない時は
イ. 関係ないものとしてかかわらない。
ロ. 自分の意見をどうしてもおし通す。
ハ. みんなに合うように考えてみる。
ニ. しばらく考えてから態度をきめる。
ホ. その他。

5．不正と思われることでも，自分に関係ないと思うときは
イ．だまっていて関係しない。
ロ．自分の意見をはっきり言う。
ハ．親か先生などに話す。
ニ．その他。

6．守りたくない規則があるときは
イ．そんなものは守らない。
ロ．守る。
ハ．規則の意味を考えて守らなければならない，と思えたら守る。守る必要ないと思えば守らない。
ニ．気にいるよう改正の努力をする。
ホ．その他。

7．弱くて，おとなしく，元気のないクラスの友に対しては
イ．相手にしない。
ロ．仲間に入れてやるように努める。
ハ．クラスの多い方の意見に従う。
ニ．その他。

8．全般的に自分の性格は
イ．意地っ張り。
ロ．最後までやりぬく。
ハ．勝ち気。
ニ．わがまま。
ホ．素直。
ヘ．まじめ。
ト．その他。

三．家庭生活について（どちらかを○で囲む）

1．自分の家は，くつろげる場所になっていますか。	は　い	いいえ
2．親と気楽に話しますか。	は　い	いいえ
3．親をたたきたいと思ったことがありますか。	あ　る	な　い
4．親に強くたたかれたことがありますか。	あ　る	な　い
5．家庭内暴力にたいしては，どう思いますか。	すべきでない	やむを得ない時もある

四．学校生活について（いずれか一つを）

1．わからない教科がありますか。	あ　る		な　い	
2．信頼できる友人がありますか。	あ　る		な　い	
3．信頼できる先生がありますか。	あ　る		な　い	
4．学校で一番こわいと感じている人は。	先　生	仲　間	先　輩	こわい人なし
5．学校の規則はきびしいと感じていますか。	い　る		いない	
6．先生に強くたたかれた時がありますか。	あ　る		な　い	
7．先生をたたきたいと思うことがありますか。	あ　る		な　い	
8．さまざまな校内暴力に対してはどう思いますか。	やむを得ない時もある		すべきでない	
9．もし，いじめられたとしたらどうしますか。	仕返しをする		だまっている	
	親か先生に話す		友に話す	

10．いじめはどうして起こると思いますか。
イ．おもしろいから
ロ．愉快だから
ハ．うっぷんを晴らしたいから
ニ．言うことを聞いてくれないから
ホ．クラスのためにならないから
ヘ．その他。

その他，思う事を自由に書いてください。

御協力ありがとうございました。

四. 調査結果について

いじめの根源を正確に捉えるために，先ず調査結果を正確に見，そこから結論を導きたいと思う。調査結果は先ず，調査問題に即して全容を述べ，次に目的に従って遂次解釈を進めたい。

1．調査結果の全容

表1　調査結果の全容

学校名	男										女										合計	
	A	B	C	D	E	F	G	EX	計	%	A	B	C	D	E	F	G	EX	計	%	人	%
人数	21	23	29	21	20	21	10	6	151		20	20	34	21	20	19	20	12	166		317	
一、将来の目標について																						
1. 一番熱心にやっていることは									145										154		299	
イ．クラブ活動・部活動	9	8	1	8	9	6	2	2	43	29.7	5	6	13	3	4	2	7	5	40	26.0	83	27.8
ロ．生徒会活動	0	0	3	1	1	0	0	0	5	2.4	1	1	1	2	0	1	0	0	6	3.9	11	3.7
ハ．高校入試	3	1	0	7	3	8	4	0	26	17.9	1	0	1	2	0	6	2	0	12	7.8	38	12.7
ニ．すぐれた人，立派な人をめざして	0	3	1	3	0	0	1	0	8	5.8	1	3	2	0	1	0	0	0	7	4.5	15	5.0
ホ．別になし	4	10	14	3	5	7	3	2	46	31.7	11	8	9	14	11	10	8	7	68	46.1	114	39.1
ヘ．その他	5	1	10	0	2	0	0	2	19	12.4	1	2	8	0	4	0	3	0	18	11.7	37	12.0
2. 将来どんな人間に									145										154		299	
イ．家族第一に	3	6	3	6	6	4	3	0	31	21.4	9	6	9	5	10	7	7	0	53	34.4	84	28.1
ロ．豊かな趣味を	6	3	5	2	2	1	3	3	22	15.2	2	4	3	8	4	7	2	1	30	22.0	52	18.7
ハ．経済的に豊かな生活を	5	5	9	8	5	4	0	0	36	24.8	1	6	8	3	2	2	3	3	25	16.2	61	20.4
ニ．社会に役立つ人に	3	4	2	3	3	5	2	0	22	15.2	4	1	5	1	0	1	4	1	16	10.4	38	12.7
ホ．発明などする人に	1	2	2	1	0	0	0	0	6	4.1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.6	7	2.3
ヘ．別になし	0	2	7	1	3	7	1	3	21	14.5	4	3	6	4	2	2	4	7	25	16.2	46	15.4
ト．その他	3	1	1	0	1	0	0	0	6	4.1	0	0	3	0	2	0	0	0	5	3.2	11	3.7
二、自分の性格は																						
1. 一度決心したことは									145										154		299	
イ．最後までやり抜く	6	5	3	4	5	4	5	1	32	22.1	4	3	10	3	3	1	7	4	31	20.1	63	21.1
ロ．途中でくじける	2	3	15	11	10	10	2	2	53	43.4	11	12	19	14	12	12	7	6	87	56.5	140	50.2
ハ．決心などしない	6	2	4	3	1	3	3	0	22	15.2	3	2	2	3	2	5	2	0	19	12.3	41	13.7
ニ．その他	6	3	7	3	2	3	0	3	24	16.6	2	3	3	1	3	1	4	2	17	11.0	41	13.7
2. 欲しいと思う品は									145										154		299	
イ．どうしても手にしたい	2	2	7	2	6	3	5	3	27	18.6	2	1	9	1	5	1	3	2	22	14.3	49	16.4
ロ．代りのもので	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0.7	1	3	3	2	1	0	1	1	11	7.1	12	4.0
ハ．時期を待つ	14	16	19	14	13	14	5	2	95	65.5	13	13	19	15	11	14	12	7	97	63.0	192	64.2

学校名	A	B	C	D	E	F	G	EX	男	計	A	B	C	D	E	F	G	EX	女	計	合	計
ニ．あきらめる	3	5	2	5	1	3	0	0	19	13.1	4	3	1	3	1	2	4	2	18	11.7	37	12.4
ホ．その他	1	0	1	0	0	1	0	0	3	2.1	0	0	2	0	2	2	0	0	6	3.9	9	3.0
3. 思うようにならないことには									145										154		299	
イ．かんしゃくを起す	1	4	6	5	4	4	2	1	26	17.9	4	7	7	8	3	4	7	3	40	26.0	66	22.1
ロ．こらえる	4	6	7	6	9	10	1	4	43	29.7	3	5	9	5	5	10	5	3	42	27.3	85	28.4
ハ．あきらめる	4	5	6	2	1	3	1	0	21	15.2	4	2	4	2	3	2	1	0	18	11.7	39	13.4
ニ．なるように工夫する	8	6	7	5	4	2	4	1	36	24.8	6	1	10	5	2	3	9	2	36	23.4	72	24.1
ホ．時期を待つ	1	2	0	1	1	1	2	0	8	5.5	2	2	1	0	2	0	1	3	8	5.2	16	5.4
ヘ．その他	3	0	3	2	1	1	0	0	10	6.9	0	3	3	1	5	0	0	1	12	7.8	22	7.4
4. みんなと意見が合わない時は									145										154		299	
イ．関係しない	1	2	2	3	3	2	3	1	16	11.0	2	2	5	1	2	2	2	0	16	10.4	32	10.7
ロ．自分の意見を通す	3	2	3	3	5	2	4	0	22	15.2	0	1	2	1	0	0	2	1	6	3.9	28	9.4
ハ．みんなと合うようにする	11	8	9	6	5	3	2	4	44	30.3	8	11	7	15	9	8	6	6	64	41.6	108	36.1
ニ．しばらく考えてから	6	11	14	8	6	14	1	1	60	41.4	9	6	18	4	8	9	9	4	63	40.9	123	41.1
ホ．その他	0	0	1	1	1	0	0	0	3	2.1	1	0	2	0	1	0	1	1	5	3.2	8	2.7
5. 不正と思っても自分に関係ない時は									145										154		299	
イ．だまって関係しない	5	9	18	11	11	11	4	2	69	47.6	9	12	12	10	13	9	6	5	71	46.0	140	46.8
ロ．自分の意見をはっきり	5	6	2	3	1	5	2	1	24	16.6	4	0	9	3	2	2	4	1	24	15.6	48	16.1
ハ．親か先生に話す	4	6	2	4	1	3	4	0	24	16.6	11	3	8	6	3	4	5	1	40	26.0	64	21.4
ニ．その他	7	2	7	3	6	2	0	3	27	18.6	1	5	5	2	2	4	5	4	24	15.6	51	17.1
6. 守りたく規則には									121										135		256	
イ．守らない	1	1	6	1	4		5	1	18	14.5	1	1	7	2	2		6	2	19	14.1	37	14.3
ロ．守る	6	11	1	7	1		1	2	27	21.8	4	6	5	7	1		4	1	27	20.0	54	20.8
ハ．考えて判断する	11	8	22	11	12		4	2	68	54.8	13	9	18	11	16		7	6	74	54.8	142	54.8
ニ．改正の努力をする	2	2	0	2	2		0	1	8	6.5	2	1	2	0	1		1	2	7	5.2	15	5.8
ホ．その他	1	1	0	0	1		0	0	3	2.4	1	3	2	1	0		2	1	9	6.7	12	4.6
7. 元気のない友には									145										154		299	
イ．相手にしない	1	4	4	5	2	8	2	0	26	17.9	0	7	2	3	2	8	5	4	27	17.5	53	17.7
ロ．仲間に入れるように	10	13	11	10	6	6	4	3	60	41.4	12	7	21	12	5	7	9	3	73	47.4	133	44.5
ハ．多い方の意見に	4	3	8	3	3	4	0	2	25	17.2	6	3	4	6	8	4	1	2	32	20.8	57	19.1
ニ．その他	11	3	6	3	9	3	4	1	39	26.9	2	3	7	0	5	0	5	3	22	14.3	61	20.4
8. 全般に自分の性格は									121										135		256	
イ．意地っ張り	1	4	1	7	3	3	1	1	17	13.7	1	2	6	1	4		4	2	18	13.3	35	12.7
ロ．最後までやり抜く	1	0	0	2	0	1	1	0	4	3.4	2	0	3	0	1		1	0	7	5.2	11	4.0
ハ．勝ち気	2	5	5	4	2	6	2	0	20	16.1	6	6	5	3	2		2	3	24	17.8	44	16.7

学校名	A	B	C	D	E	F	G	EX	男	計	A	B	C	D	E	F	G	EX	女	計	合	計
ニ．わがまま	5	5	7	4	1	7	3	0	25	20.2	4	6	5	7	6		10	4	38	28.1	63	23.4
ホ．素直	1	4	1	2	2	5	4	0	14	11.3	1	1	4	1	4		2	0	13	9.6	27	10.7
ヘ．まじめ	3	0	2	0	4	7	2	0	11	8.9	2	0	1	2	0		1	0	6	4.4	17	8.0
ト．その他	8	5	13	2	7	8	1	5	36	29.0	3	5	10	7	5		3	3	33	24.4	69	25.8
三 家庭生活について																						
1. くつろげる場所か									124										135		259	
イ．はい	16	21	23	18	17	37	9	6	104	83.9	18	15	26	19	15		17	12	110	81.5	214	83.9
ロ．いいえ	5	2	5	3	3	3	1	0	19	15.3	2	5	8	2	4		3	0	24	17.8	43	15.4
2. 親と気軽に話すか									124										135		259	
イ．はい	18	17	22	19	14	38	6	5	96	77.4	18	16	28	19	18		17	12	116	85.9	212	83.6
ロ．いいえ	2	6	7	2	6	2	4	1	27	21.8	2	4	6	2	2		1	0	17	12.6	44	15.4
3. 親をたたきたいと思ったか									124										135		259	
イ．ある	5	12	17	10	16	23	5	3	65	52.4	6	15	22	14	14		13	8	84	62.2	149	57.5
ロ．ない	16	11	12	11	4	17	5	3	59	47.6	14	5	12	7	6		7	4	51	37.8	110	42.5
4. 親にたたかれたことは									124										135		259	
イ．ある	16	19	18	15	13	29	9	6	90	72.3	11	14	17	14	14		17	10	87	64.4	177	68.9
ロ．ない	5	4	11	6	17	11	0	0	43	26.6	9	6	17	7	6		2	2	47	34.4	90	30.4
5. 家庭内暴力は									124										135		259	
イ．すべきでない	16	15	18	12	11	22	3	6	75	60.6	17	11	20	14	12		9	10	83	61.5	158	60.2
ロ．やむを得ない時もある	5	8	11	9	8	17	5	0	46	37.1	3	9	13	7	8		9	2	49	36.3	95	37.5
四 学校生活について																						
1. わからない教科が									124										135		259	
イ．ある	18	18	23	14	13		10	6	96	77.4	17	19	29	18	17		15	12	115	85.2	211	81.5
ロ．ない	3	5	6	7	7		0	0	28	22.6	3	1	4	3	2		5	0	18	13.3	46	17.8
2. 信頼できる友人は									124										135		259	
イ．ある	20	18	15	16	18		6	6	93	75.0	20	17	30	15	18		20	10	120	88.9	213	82.2
ロ．ない	1	5	14	5	2		4	0	31	25.0	0	3	4	6	2		0	1	15	11.1	46	17.8
3. 信頼できる先生は									124										135		259	
イ．ある	12	11	8	13	14		2	3	60	48.4	14	4	17	7	10		10	3	62	45.9	122	47.1
ロ．ない	9	12	21	8	6		8	3	64	51.6	5	16	16	14	10		7	8	68	51.9	132	51.7
4. 学校で一番こわい人は									124										135		259	
イ．先生	3	6	7	7	0		1	0	24	19.4	5	4	4	9	3		0	0	25	18.5	49	18.9
ロ．仲間	0	2	2	3	2		0	1	9	7.3	1	2	10	5	4		2	2	24	17.8	33	12.7
ハ．先輩	5	4	14	4	11		7	4	45	36.3	9	5	12	3	5		10	4	44	32.6	89	34.4
ニ．こわい人なし	10	11	7	7	7		3	1	45	36.3	5	9	8	4	8		7	5	41	30.4	86	33.2

学校名	A	B	C	D	E	F	G	EX	男	計	A	B	C	D	E	F	G	EX	女	計	合	計
5. 学校の規則は									124										135		259	
イ．厳しいと感じている	11	14	16	18	13		5	5	77	62.1	10	16	10	19	15		9	6	79	58.5	156	60.2
ロ．厳しいと感じていない	10	9	13	3	7		3	1	45	36.3	10	4	23	2	5		11	5	55	40.7	100	38.6
6. 先生に強くたたかれたことは									124										135		259	
イ．ある	7	18	16	7	7		9	4	64	51.6	2	14	7	7	3		5	3	38	28.1	102	39.4
ロ．ない	14	5	13	14	13		1	2	60	48.4	18	6	27	14	17		14	8	96	71.1	156	60.2
7. 先生をたたきたいと思うことは									124										135		259	
イ．ある	2	8	17	10	6		7	4	50	40.3	2	10	10	10	6		11	6	49	36.3	99	38.2
ロ．ない	18	15	11	11	13		3	2	71	57.3	18	10	23	11	12		8	5	82	60.7	153	59.1
8. 校内暴力は									124										135		259	
イ．やむを得ない	4	10	14	11	7		7	4	53	42.7	1	9	16	11	8		10	3	55	40.7	108	41.7
ロ．すべきでない	16	13	15	10	13		2	2	69	55.6	18	11	18	10	12		9	8	78	57.8	147	56.8
9. もしいじめられたら									124										135		259	
イ．仕返しをする	11	13	19	10	7		7	5	67	54.0	1	3	7	6	1		6	0	24	17.8	91	35.1
ロ．だまっている	1	7	3	1	5		3	1	20	16.1	2	1	3	2	3		2	2	13	9.6	33	12.7
ハ．親か先生に話す	6	1	4	2	1		1	0	15	12.1	11	1	4	4	3		3	5	26	19.3	41	12.0
ニ．友に話す	3	2	3	8	7		0	0	23	18.5	6	15	20	9	13		8	5	71	52.6	94	36.3
10. いじめはどうして起こるか									124										135		259	
イ．おもしろいから	5	9	6	5	1		9	0	35	28.2	1	3	8	2	3		3	1	20	14.8	55	21.2
ロ．愉快だから	1	0	0	0	4		1	0	6	4.8	0	1	2	2	2		0	0	7	5.2	13	5.0
ハ．うっぷんを張らしたいから	7	5	12	8	6		1	1	39	31.5	9	5	12	12	11		8	0	57	42.2	96	37.1
ニ．言うことを聞いてくれないから	2	3	3	5	4		1	0	18	14.5	4	3	5	3	1		3	1	19	14.1	37	14.3
ホ．クラスのためにならないから	0	0	0	0	0		1	0	1	0.8	0	0	1	0	0		1	0	2	1.5	3	1.2
ヘ．その他	6	6	7	3	5		0	5	27	21.8	6	11	6	2	3		5	9	33	24.4	60	23.2

EX校及び○印は統計に入れていない。

2．調査結果の解釈

(1) いじめはどうして起るか。

先ずいじめの原因を探ねてみたい。このことについて生徒達はどのように答えているであろうか。

イ．うっぷんを晴らしたいから　37.1%

ロ．面白く愉快だから　26.2

ハ．言うことを聞いてくれないから　14.3

ニ．クラスのためにならないから　0.8

ホ．その他（自由記述）　23.2

自由記述の内容を拾ってみると

- 嫌いだから。気に入らないから。なまいきだから。
- 規則が厳しいから。勉強がむつかしいから。試験の結果が知られてしまうから。
- やる人は自分が偉いと思っているから。
- 加える子は，小さい時から一人ボッチで愛情に飢えているから。
- いじめっ子はそれなりの理由は持っていない。いいがかりをつけるだけ。自分さえよければよい。
- やられる子は何時も抵抗しないから。
- 先生が注意しないからエスカレートするだけ。

このような答えから結論づけられることは次の通りである。

イ．最大の原因は「うっぷんを晴らすため」である。しかも，それは面白く愉快な結果になるので，結局，いじめの最大の原因は，うっぷんを晴らすため，ということになる。６３.３％という圧倒的数になる。

なお，面白く愉快だからという心情は，うっぷんとは別に動物的心情も含まれていると解したい。

ロ．次に言うことを聞いてくれないから。１割余がある。これは支配の要求であり，成績はあまりよくなく，体格がよく，ボス的な存在の子である。このタイプの根源はうっぷんよりむしろ政治的支配欲にあると見ることが出来る。

ハ．クラスのためにならないから。つまり，クラスをよくするためにいじめるといったことは殆んどない。正義感といった社会的態度に根ざすこともほとんどないと言うことが出来る。

以上のことは，彼等の自由記述からもうかがえる。いじめは全く個人的な好嫌に根ざしているので，社会的意味は持っていないということができる。従って，いじめの本質を，先ず，次のようにまとめたい。

いじめは，自分たちの個人的なうっぷんを晴らすために，また，自分たちの本能的欲求を満たすために，無抵抗な弱い者に，集団で，しかも歯止めなく攻撃する行為である，と。何故，無抵抗な弱者に向うか，何故集団で当らなければならないか、何故程度を知らないか，といったことについては，後に示す生活の目標や性格の状態を理解すれば，自然に了解が得られてくる。

従って，差別という意味で，同和問題に類似している面はあるが，本質的には別の問題であることが了解できる。同和問題は歴史的に形成された差別が問題であり，その根源は長い伝統の上に立っているが，いじめの問題は，うっぷんや動物的本能の欲求であり，根は深いものではない。従って，全力を注げば，現象的に，又，表面的には解決できない問題ではない。

ただしかし，いじめの本質を，次第に明らかにされるような人間の道徳的な成長の問題や，緊張を増幅する日本社会の問題，友達関係から自然のうちに人間関係のあり方を体得できない一人っ子の問題等に結びつければ，解決は容易でないことは言うまでもない。ただ，表面的には解決出来る問題と言っているのは，同和問題のように，根の深い問題ではないという立場からである。

(2)　うっぷんの原因は何か

弱い者をいじめて満足するとか，他人を支配するといった本能的欲求の満足は，しつけによれば

よいので，原因を探求する必要はない。問題は，うっぷんの原因であるが，これも，社会的緊張といった面を探れば，容易なことではないが，当面の原因として探ってみれば次のようになる。

イ．わからない教科がある。

男子　77.4%　　女子　85.2%　　平均　81.5%

ロ．規則が厳しい。

男子　62.1%　　女子　58.5%　　平均　60.2%

「厳しいからよけいに守りたくないし，反抗したくなる」，「先生が威張り過ぎる」，「生徒の声を聞いてくれないから憎む」等がその声である。

ハ．体罰はやはりいじめの原因となっている。直接的にはあまりないという人もあるが。説明は次に。

ニ．家庭は，大多数の者がうっぷんの対象となっていない。対象となるのは1割強。家庭では甘えが目立ち，それが家庭内暴力を許すと思われるが，第2部で深層に迫っている。

うっぷんの最大の原因は，教科がむつかしいということ。これは，中学校には宿命的ともいうべきもので，能力差の甚しい生徒に，3年間も平等に指導するということは最大の問題点である。このことこそ，最重要な問題であることを訴えておきたい。学制上やむを得ないとは思うが。

規則への反発，これも大きな原因となっている。規則の指導の仕方を身につけたい。

体罰や家庭内暴力の問題は重要であるので，更に分析を進めたい。

(3)　体罰と生徒の暴力的傾向の関係

このことを5校の男子102人，女子115人についてみれば次のようになる。

イ．体罰を受けている者は男子58人，56.7%，女子37人，32.1%。このうち，

・先生をたたきたいと思うことがある者

男子　35人　60.3%　　女子　25人　67.6%

・校内暴力もやむを得ないとする者

男子　30人　51.7%　　女子　25人　67.6%

ロ．体罰を受けたことのない者は，男子44人，36.1%，女子78人，67.8%。このうち，

・先生をたたきたいと思うことがある者

男子　14人　31.8%　　女子　21人　26.9%

・校内暴力もやむを得ないとする者

男子　13人　29.5%　　女子24人　30.7%

この表から次の二点が明瞭になる。

第1は，先生に強くたたかれた経験のある者は，経験のない者より2倍以上の数値を示している。これは本人の性格に基づくことによることもあるが，また，体罰を受けた者は，より暴力的になることも物語っている。してみれば，教師の体罰は，生徒の暴力的傾向を促進することにもなるので，体罰は行ってはならない。体罰はいじめの原因にもなる。

体罰が教育的に真に効果的でないことは，本学生の次の結果にもよく表われている。

体罰は効果があると思うか。

	1回生女子	2回生女子	3回生女子	女子平均	1回生男子
あると思う	21%	13%	24%	20%	33%
あまりないと思う	49	38	32	35	44
わからない	30	49	44	44	22

すなわち，各学年に亘って否定的な見解が多い。しかも，8割も受けたことのある男子の半数近くが否定的なのは貴重である。ただし，肯定的なものが2割もあることは反省を要する。

第2に重要なことは，体罰を受けたことのない者でも，30%，約3割は先生をたたきたいと思うこともあるし，校内暴力もやむを得ないと思っていることである。このことは次の家庭内暴力の意識や後に示される成長の姿とも相応じて重要であるので，このことを詳説したい。

(4) 家庭生活のうっぷんの状態は

家庭生活はうっぷんの原因となっているであろうか。このことについては次のように結論できる。

今の中学生の大部分，つまり8割以上は満足な状態にある。しかし，その満足な状態故に甘えが目立ち，そのために，遂に，家庭内暴力の傾向さえ産んでいる。これは，家庭での育て方が問題であることを物語る。しかしまた，1～2割の問題の家庭には細心の注意が必要である。

と。このことは次のことから明瞭になってくる。

	男　子	女　子	平　均
・家庭がくつろげる場所になっている	83.9%	81.5%	82.6%
・親と気軽に話せる	77.4	85.9	83.6

しかし，

・親をたたきたいと思うことがある	52.4%	62.2%	57.5%
・家庭内暴力はやむを得ない	60.5	61.5	60.2

8割以上が好ましい環境にありながら，60%以上の者が親をたたきたいと思い，家庭内暴力もやむを得ないと思っていることは極めて重大であるので，その内容を，5校男子94人，女子139人について細かく分析してみれば，

イ．家庭はくつろげる場所であり，親とも気軽に話せる者は（両方満足）

男　子	女　子	平　均
69人 73.4%	114人 82.0%	78.5%

このうち，

	男　子	女　子	平　均
・親をたたきたいと思うことがある	40.3%	58.0%	51.4%
・家庭内暴力もやむを得ない	32.0	34.0	33.1

ロ．何れか一方不満足を感じている者。人数は少ないが。

・親をたたきたいと思うことがある

男子10人で55%，女子13人で65%，計23人で58%。

・家庭内暴力もやむを得ない

男子11人で55%，女子16人で78%，計27人で64%。

ハ．両方とも不満足である者は極めて少ないが。

・親をたたきたいと思うことがある

男子５人で100%，女子３人で100%，計８人で100%。

・家庭内暴力もやむを得ない

男子２人，女子０。

この結果から理解できるように，家庭はくつろげる場所であり，親と気軽に話せるようになっているのが最もよい。不満足な者ほどよく成長していない。

以上のことから，家庭生活と暴力的傾向との関係をまとめてみると次のようになる。

今の中学生は，８割以上が満足な家庭環境にある。問題を持つ家庭は１割余。そして，満足な状態にある方が暴力的傾向は少ない。しかし，満足な状態におかれている者が何故，半数以上が親をたたきたいと思い，３分の１の生徒が，家庭内暴力もやむを得ないと，思っているのであろうか。前節の教師に対する場合とほとんど同じ結果になっていることは，極めて重要なことである。

これは甘えの結果であり，満足と過保護のうちに，前面にたちはだかれることもなく，正しいコントロールを受けることもなく，厳しく鍛えられることもなく成長してきた結果と言いたい。欲求不満を乗り越える意志力の不足である。

つまり，個体は強く鍛えられ，前面にたちはだかれて，それを乗り越える経験を積まなくては，立派に成長できないものであることを物語っていると思う。そして，それはまた，次に述べる徳性や性格の成長状況とも，極めてよく相応じている。

このことは，リンク編のカントの教育学の叙述とも一致しているので，参考までに挙げておきたい。

> 幼少の頃自分の意のままにさせておかれ，少しも抵抗を受けなかったような人は，生涯どこか粗放なところを脱けられない。それからまた，幼少の頃，母親の愛撫にあまり甘やかされすぎるのも為にならない，…（P54）…。絶えず愛撫したりするのも，上に言った揶揄的な教育に劣らずよくない。これは児童の我意を募らせ，児童を不実にする。また，そのために，両親の弱点が児童に露顕するので，児童は両親に対して必ず払うべき尊敬を払わなくなる。（P108）……。

なお，第二部において，塹江が現在の（中学２年生当時）親子関係を調査して，干渉的な拒否型が多い（あれもしなさい，これもしなさいといったように）と結論づけているが，それは強制的な過保護といったように考えられ，本稿の結論と矛盾しないことを述べておきたい。

さて，以上の結論を更に裏付けている成長の方向，つまり，意志の力，耐性の状態，生活の目標，正義感等について分析を進めたい。

(5) 意志の力や耐性の状態は。（7校全員について）

イ．一度決心したことは

	男　子	女　子	平　均
① 最後までやり抜く	22.1%	20.1%	21.0%
② 途中でくじける	43.4	56.5	50.2
③ 決心などしない	15.2	12.3	13.1
④ その他	16.6	11.0	13.7

最後までやり抜こうとする者は僅々2割。途中で挫けたり，決心などしないものは，60〜70%に及んでいる。

ロ．全般的に自分の性格は

	男　子	女　子	平　均
① 意地っ張り	13.7%	13.3%	13.0%
② 最後までやり抜く	3.4	5.2	4.0
③ 勝ち気	16.1	17.8	16.7
④ わがまま	20.2	28.1	23.4
⑤ 素直	11.3	9.6	10.7
⑥ まじめ	8.9	4.4	6.0
⑦ その他	29.0	24.4	25.8

とにかく，わがままが最高で，最後までやり抜くのが最低，寒心の至りである。

(6) 正義感の状態は

いじめに対する日米の相違点は，アメリカ人はいじめを止める者があるが，日本には止める者がないと言われているが，

イ．不正と思っても自分に関係ない時は

	男　子	女　子	平　均
① だまって関係しない	47.6%	46.0%	46.8%
② 自分の意見をはっきり言う	16.6	15.6	16.1
③ 親か先生に話す	16.6	26.0	21.4
④ その他	18.6	15.6	17.1

約半数がだまって関係しようとしないし，自分の意見を言える者は2割未満。

ロ．元気のない友人には

	男　子	女　子	平　均
① 相手にしない	17.9%	17.5%	17.7%
② 仲間にする	41.4	47.4	44.5
③ 多い方の意見に従う	17.2	20.8	19.1
④ その他	26.9	14.3	20.4

仲間にするという思いやりのあるものは4～5割あるのは望ましいが，①，②を加えると，4割近くもあることは，同情心が十分育っていないと言える。

(7)　市民の義務としての順法の態度は

守りたくない規則に対しては。

	男　子	女　子	平　均
①　守らない	14.5%	14.0%	14.3%
②　守る	21.8	20.0	20.8
③　考えて判断する	54.8	54.8	54.8
④　改正の努力をする	6.5	5.2	5.8
⑤　その他	26.9	14.3	20.4

①，②の状態からも，恣意が目立つと考える。

(8)　生活の目標は

目標がなくてはあらゆるものは動かないが。

イ．一番熱心にやっていることは。

	男　子	女　子	平　均
①　クラブ・部活動	29.7%	26.0%	27.8%
②　生徒会活動	2.4	3.9	3.7
③　高校入試	17.9	7.8	12.7
④　すぐれた立派な人になるため	5.5	4.5	5.0
⑤　別になし	31.7	46.1	39.1
⑥　その他	12.4	11.8	12.0

女子の半数近くが別になしには驚かざるを得ない。中学2年生は立志の時代であるに拘らず，④が5％程度であることは意欲がない。

ロ．将来どんな人間になりたいか。

	男　子	女　子	平　均
①　家族第一に	21.4%	34.4%	28.1%
②　豊かな趣味に	15.2	22.1	18.7
③　経済的に豊かな生活を	24.8	16.2	20.4
④　社会に役立つ人に	15.2	10.4	12.7
⑤　発明などする人に	4.1	0.6	2.3
⑥　別になし	14.5	16.2	15.4
⑦　その他	4.1	3.2	3.7

家族第一のマイホーム主義が第一，第二が経済的豊かさ，第三が趣味に。別になしが1割5分程。社会に役立つ人とか発明などする人には，合わせて1割5分程度。結局，個人的な生き方であって，社会的人間としての志向は乏しい。

(9) 最後に教師と生徒との信頼関係は。教師の勤務態度は真剣であるように感じられるが。

	男　子	女　子	平　均
・信頼出来る先生がある	48.4%	45.4%	47.1%
・信頼出来る先生がない	51.6	51.9	51.7

このことは学校毎に著しく差が生じている。「信頼出来る先生がある」と「信頼出来る先生がいない」とが正反対になっているが如きである。本調査を通じて，反対の結果が見られるのはこの問題だけである。このことは，学校の教育力の結果と見られ，教師の側の反省資料として受け取りたい。

さはあれ，全体としてみると，「信頼出来る先生がない」と答えるものの方が多いことは，生徒の批判的精神の強過ぎることを物語っているように思われてならない。調査していただいた学校の先生方は，秀れた先生が揃っている学校が多いので。とにかく，そういう結果が出てくることは再考したいことである。

3．いじめの根源に対する解釈

以上の調査結果から，いじめの根源はまさにここにあると容易に帰納できるようになった。もちろんそれは教育上の問題としてではあるが。もちろん,いじめの根源は，社会環境の要因，家庭環境の要因等さまざまな複合的なものであることは言うまでもないが，少なくとも教育の問題としては明瞭に理解できるようになった。つまり，今の子ども達の成長の仕方に根本的な問題があるということである。このことを，前述の調査結果に基づいてまとめてみよう。

今の生徒は生きる目標を持っていない。ただ生きているだけか，マイホーム主義かである。有為な人になろうとか，社会に貢献できる人になろう，といった気概や気力，そして抱負などは極めて少ない。意志や忍耐力も弱く，正義感や理性的判断力も弱い。わがままと甘えが目立ち，個人的な好嫌で気安く行動する。先生たちが，

『何故あの子があんなことをしたり，あんなことに参加するのかわからない。』

と嘆息したり，

『どうして，幼稚園時代に斯うだったと言ったような理由づけをするのか分らない』

と不思議がるのも，このような生徒の実態を知れば，自然に理解できてくる。

また，意志が弱いから，弱い者しかいじめの対象にならないし，集団で当るしかない。多数の行き方に同調するのも同じことであり，歯止めのきかないのも当然となる。

何故，このような子どもに成長してしまったのであろうか。それは，幼児期から今日までの育ち方，成長の仕方に問題があったとしか言いようがない。そのような子ども達に成長させてしまった大人達に責任があると明言せざるを得ない。

従って，いじめを根絶するためには，もっと気力に富んだ意志の強い理性的な判断と行動の出来る青年を養成しなければならないわけである。それは教育の本質的なことであり，真の教育の実践にあると強く訴えたい。

しからば，真の教育の実践を妨げた要因は何か，真の教育とは如何なるものであるか，等々に就ては，第二部の結果を踏まえて，第三部として論述したい。

第二部　中学生の親子関係

一．目的と調査期・調査問題

第1部で「いじめ」の原因として，欲求不満によるうさばらしということが考えられた。また，家庭生活は満足のいくものでいるにもかかわらず，親に対して暴力をふるいたくなることがあるという調査結果が得られた。本論文の第2部では，第1部の結論をさらに吟味するために，中学生の親子関係はどういう姿であるか，また，中学生は何に対して欲求不満をいだいているのかを調べる。

≪方　法≫

田研式親子関係診断テスト〔児童生徒用〕（日本文化科学社），教研式プロブレムチェックリスト（図書文化社）の2種のテストを用いて，親子関係の姿と欲求不満の状態を調べた。被験者は，岐阜市の中学校，岐阜市郊外の中学校，名古屋市千種区の中学校，計3中学の2年生の1クラス（男女）である。調査期間は，1961年1月24日から3月30日までの間で，2つのテストはそれぞれの学校で2日間にわたって実施された。

親子関係診断テストは，今回は児童生徒用のみを用い，両親用は用いなかった。子供から見た両親の態度をたずねたもので，はじめに父親についてたずねた結果を黒鉛筆で，次に母親についてたずねた結果を赤鉛筆で記入させた。問題項目は親の望ましくない態度，行動を扱っており，それが次のように10の型に分類され，それが2つの型ごとにまとめられて5つの分類になっている。

Ⅰ　拒　　否 ｛ ①　消極的拒否型
　　②　積極的拒否型

Ⅱ　支　　配 ｛ ③　厳格型
　　④　期待型

Ⅲ　保　　護 ｛ ⑤　干渉型
　　⑥　不安型

Ⅳ　服　　従 ｛ ⑦　溺愛型
　　⑧　盲従型

Ⅴ　矛盾不一致 ｛ ⑨　矛盾型
　　⑩　不一致型

欲求不満について調べたプロブレムチェックリストは，生徒各自が番号順に問題を読み，その時点で気になっている問題や悩んでいる問題にアンダーラインを引くよう指示する。所要時間は約40分である。調査項目は全部で210項目あり，30項目ずつ7領域に分けられている。7領域というのは，①健康（健康および身体発達について），②学校（勉学および学校への適応などについて），③家庭（家庭，家族のことについて），④将来（金銭，仕事，進学，職業などについて），⑤異性（異性の友人関係について），⑥社会性（対人場面における個人の一般的な反応傾向について），⑦性格（自分の性格などについて），である。各領域に属する項目は5項目ずつまとまって，横段にならべてある。例えば，

健康に属する項目は1～5，36～40，71～75，106～110，141～145，176～180，である。

二. 調査の結果

親子関係診断テストの第一部を採点の手引に従って採点した。すなわち，a欄に○をつけたもの2点，b欄に○をつけたもの1点，c欄に○をつけたもの0点とし，これを10問題ずつからなる各型（①消極的拒否型，②積極的拒否型，③厳格型，④期待型，⑤干渉型，⑥不安型，⑦溺愛型，⑧盲従型，⑨矛盾型，⑩不一致型）ごとに，父親，母親別に集計した。その各型ごとの得点を換算表を用いて，パーセンタイルに換算した。これを各被調査者ごとにダイアグラムに記入した。手引書によると，20パーセンタイル以下は危険地帯であり，20から40パーセンタイルまでは準危険地帯である。

各被調査者ごとに父母別の親の型をみていき，準危険地帯に入るものに1点，危険地帯に入るものに2点の得点を与えてみた。それを集計したものが表2である。

表2　親子関係診断検査の1人当りの平均点

学校名	親のタイプ	1 消極的拒否型		2 積極的拒否型		3 厳格型		4 期待型		5 干渉型		6 不安型		7 溺愛型		8 盲従型		計	
	父母の別	父	母	父	母	父	母	父	母	父	母	父	母	父	母	父	母	父	母
A校	男子 N＝11	1.2	1.4	1.2	1.3	1.5	1.2	1.1	1.3	0.7	0.7	0.5	1.0	1.0	1.3	0.5	0.5	7.7	8.6
	女子 N＝19	0.8	0.7	0.7	0.8	1.2	1.0	0.4	0.9	0.4	0.9	1.2	1.2	1.4	1.4	0.6	0.3	6.6	7.1
	計	1.0	0.9	0.9	1.0	1.3	1.1	0.6	1.0	0.5	0.8	1.0	1.1	1.2	1.3	0.6	0.4	7.0	7.7
B校	男子 父（N＝17）母（N＝19）	0.1	0.1	0.1	0.2	0.4	0.3	0.1	0.1	0.0	0.2	0.1	0.2	0.1	0.2	0.2	0.2	0.9	1.3
	女子 父（N＝18）母（N＝19）	0.3	0.4	0.4	0.7	0.6	0.6	0.2	0.3	0.1	0.5	0.2	0.4	0.3	0.5	0.2	0.0	2.3	3.4
	計	0.2	0.2	0.2	0.4	0.5	0.4	0.1	0.2	0.1	0.3	0.2	0.3	0.2	0.3	0.2	0.1	1.7	2.3
C校	男子 N＝22	0.8	1.0	0.8	1.0	1.0	1.1	0.5	1.0	0.4	0.6	0.1	0.1	0.0	0.0	0.1	0.1	3.7.	5.0
	女子 父（N＝19）母（N＝20）	0.3	0.3	0.2	0.2	0.5	0.5	0.3	0.4	0.2	0.2	0.1	0.2	0.2	0,1	0.3	0.3	2.2	2.1
	計	0.6	0.6	0.5	0.6	0.8	0.8	0.4	0.7	0.3	0.4	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	3.0	3.6
総計	父 N＝106 母 N＝110	0.6	0.6	0.5	0.7	0.8	0.8	0.4	0.6	0.3	0.5	0.4	0.4	0.5	0.5	0.3	0.2	3.7	4.3

各中学で少し傾向にちがいはあるが，3校をまとめていえることは厳格型の親が多く，それは大きな分類に分けると，支配型の親が多いという結果になった。（表3参照）

欲求不満テストの結果の整理は，各被調査者ごとに，領域ごとの下線の数をかぞえ得点とした。表4は，各中学ごとの領域別の得点である。どの中学でも，悩み，欲求不満の第1位は「学校」である。この項目は学校内の人間関係に関する項目はほんのわずかで，大部分が勉強，成績に関するものである。

表3　親の態度分類別得点（合計点）

	拒否型		支配型		保護型		服従型	
	父	母	父	母	父	母	父	母
A中　N＝30	56	58	57	63	44	58	54	51
B中　父（N＝35）母（N＝38）	15	25	21	23	8	23	14	17
C中　父（N＝41）母（N＝42）	46	54	48	63	17	23	13	12
計	117	137	126	149	69	104	81	80
平均　父（N＝106）母（N＝110）	1.10	1.25	1.19	1.35	0.65	0.95	0.76	0.73

表4　欲求不満テストの1人当りの平均得点

		健康	学校	家庭	将来	異性	社会	性格	計
A中	男子　N＝10	4.8	10.5	4.0	6.7	3.6	4.2	7.1	40.9
	女子　N＝20	5.1	8.6	3.8	3.6	2.5	5.4	7.3	36.2
B中	男子　N＝19	1.0	3.1	0.3	1.5	0.3	1.3	1.4	8.4
	女子　N＝21	2.4	5.9	2.7	2.8	0.9	2.2	4.3	21.2
C中	男子　N＝22	3.9	8.5	4.9	7.5	4.5	4.4	8.4	42.1
	女子　N＝20	2.8	6.9	2.6	3.5	2.6	2.8	6.5	27.5
計	男子	3.0	6.7	3.0	5.1	2.8	3.2	5.5	29.3
	女子	3.3	7.0	3.0	3.2	1.9	3.4	5.9	27.6

三. 結果，考察

親子関係診断検査の結果は，3校を合計すると，中学2年生の子供は父親に対しても母親に対しても「厳格型」としてのイメージをもっとも強く抱いていることがわかった。ここでいう厳格型とは，質問表の3.の領域にあてはまるもので，父親（あるいは母親）が，子どもにあまり相談しないで，親の考えで子供のすべきこと，方針を決めてしまい，子供の成績や行動に対して，いつも厳しく見張ったり，叱ったりするというものである。子供は自分の意見やしたいことが親から認めてもらえることがない。

次に多かった型は，「積極的拒否型」であった。これは，質問表の2の領域にあてはまるもので，父親（母親）は，現実の子供の姿に対して非常に不満足で，絶えず子供を叱り，罰しているタイプである。体罰，虐待，威嚇，屈辱，過度の要求，保護養育の責任の放棄などの態度を示す親である。自分の理想にそわない現実の子供に対して，そして，自我の目覚めかけた生意気ざかりの子供に対して，親は懸命にこごとをいったり，たたいたりして，何とか親の考える方向に子供をひっぱっていこうとし，あるいは，心のイライラをぶつけているといえる。この型は，父親にも多いが，母親に顕著である。

次に多いのが，質問表の1の領域にあてはまる「消極的拒否型」である。これは「積極的拒否型」のように直接に子供をたたいたり，絶えず叱言をいったりするのではないが，現実の子供の姿に充分満足できないで，子供を積極的に愛したり，誇りを持ったりすることができない。そのため，子供の存在を無視するような態度にでたり，子供を不信の眼でみていたりする型である。

結果全体からみると，質問表の5の「干渉型」，6の「不安型」，8の「盲従型」は意外に低い数値しか示していない。

以上の型を2つずつ合わせた親の態度をみてみると，父親も母親も最も数値が高いのは「支配的態度」である。これは先に述べた「厳格型」と「期待型」をかねそなえた親の態度である。子供に対して過度の支配力をもつ親で，子供は親の所有物とみなし絶対の権力で統制しようとする態度である。こういった親の態度から起る問題は，手引書によれば，意欲消失，希望消失，冷淡，無感動で，生活を自主的に運営する能力に欠けるという。

その次に，3校全体として多かったのは，父親，母親ともに「拒否的態度」である。先にのべた「消極的拒否型」および「積極的拒否型」を合わせた態度である。親の子供に対する感情や態度に，拒否的傾向がある場合で，子供への愛情の欠如，援助の拒否，子供の働きかけに対する無視のような態度をいう。この場合，愛情そのものが欠如している場合と，愛情はあってもその表現に欠陥があり，子供には伝わらない場合とがある。こうした拒否的態度を持つ親のもとに育った子どもの持つ問題行動としては，手引書によれば，およそあらゆる種類のものがあり，注目牽引，乱暴攻撃，心身の発達遅滞，非行，神経症的傾向，その他がある。

意外に少なかったのは，子供をよりよくするために細々とした世話をやき，出来るだけの助力や指図を与えようとする「干渉型」と，子供の日常生活，学業，健康，交友関係，将来の進路などに，ほとんど無意味と思われる親の心配や不安を抱き，そのために必要以上の責任をとり，過度の援助や保護を与える「不安型」との合わさった「保護的態度」の親である。子供に対して，心配，不安，恐怖などを抱いている親は，しばしばその感情を子供を過度に保護することによって解消しようとする。こういう態度の親をもつ子供の問題は，心身の発達遅滞，依頼心が強く，忍耐力に欠け，責任転嫁が多く，社会的成熟が遅れ，ひっこみ思案で孤独になりやすいなどである。親の不安からくる子供への干渉という図式が心理学的にいう過保護の意味であるが，世間一般でいう過保護という概念は，これから少しずれて使われているかもしれない。

また同じく，「盲目型」と「溺愛型」からなる「服従的態度」を示す親も，意外に少なかった。子供の要求や主張は何事であれ無条件で受け入れてやり，そうすることに満足している親である。単に子供に対する愛情が過多であるばかりでなく，子供に服従的に奉仕することによって，親の満たされない感情を補っているタイプといえる。世間でいう過保護の意味はこのタイプの親の態度に最も近いかもしれない。こういう親に育てられた子供は，手引書によれば，情緒的な発達がさまたげられて，非常に幼児的な特徴を現すという。少しの欲求不満に対しても，泣く，わめく，あばれる，などの態度をとり自己統制が欠けている。また自己中心的で，周囲との協調性がなく社会的技術も幼稚である。

現代の子供達は過保護の親のもとに育っているとよくいわれるし，この論文の第1部の結果でも，

家庭生活や親には満足しながらも，親に対して暴力をふるいたくなるという甘えを持った子供の姿が見られる。それでは第2部の調査で，「支配的態度」をとる親が多く，「保護的態度」をとる親が少なかったことをどのように考えればよいであろうか。

まず第1に考えられることは，「保護的態度」を構成している5の「干渉型」，6の「不安型」の質問項目が，中学生にとってはあまりにも幼稚っぽいものであったのではないかということである。この検査は小学校4年生以上が対象となっており，小学生では過保護にあたると反応される項目が，中学2年生ではもはや該当しないということがあり，たとえ，その中学生が世間一般からは過保護とされるようでもこの検査ではそのようには出てこないということが考えられる。

第2に考えられることは，世間一般の人が子供達のおかれた状況を誤解し，勝手に現代の子供達は過保護だとレッテルをはっているのではないかということである。この検査の作成されたのは昭和33年である。その頃には過保護という言葉が目新しいものであったが，それから，もう少しで30年もたつとうという現在では，過保護の反省も親の間で行なわれ，もっと厳しい親の方向に変ってきつつあるのではないかということである。この検査が作成された時点でも，教育相談に来談した問題をもつ子供の親（29名）に対して行なった検査では，消極的拒否型の傾向が最も強くでている。この第2の立場は，現代の子供は，過保護というよりも支配的，拒否的態度をもつ親のもとで，自分の本当の生きるエネルギーを抑圧され，欲求不満を大いにくすぶらせているということを意味する。しかし，本論文の第1部の調査では，子供達は家庭に対しては，概ね満足しているという結果であったし，第2部の調査で行なった欲求不満テストでも，この第2の考えも絶対に正しいとはいえなくなる。

第3に考えられるのは，ここでいう「支配的態度」の意味が「過保護的態度」と対立するものではなく，同じ意味あいから出てきているのではないかということである。親は自分自身に不安を持ち，子供に対してあれやこれやと干渉する。これが過保護であるが，その干渉の強まったもの，それが支配的態度なのではないか。親は厳格型の姿をとるが，これはより高い理想をめざす倫理的な意味での厳格さを示すのではなく，目先の入試や学校の成績に限るような点での厳格さで，必死に競争社会の中で子供のしりをたたいているという厳格さなのではないか。

欲求不満テストの結果でもわかるように，子供達の悩みの第1は「学校」である。悩みとして多かったのは，学校の成績が下がりそうで心配だ，試験がこわい，学校の勉強がよくできないので困る，数学がよくできないのが気にかかる，成績のことが気になってたまらない，という成績に関するものである。また，あまり利口でない，もの覚えが悪いのが気になるという，自分の成績の悪さは努力のたりなさではなく，能力のなさだとするあきらめに似た悩みも多い。

親は子供が小学生時代までに持っていた期待や夢が，中学生になると次第に消えかけていく現実の中で，過保護の気持を持ちながら，まだ夢はすてきれずに，もっともっとと厳格型に，あるいはさらに拒否型へとむかっているのではないだろうか。そういう姿に子供達は，一応，家庭は満足すべき状態にあるとしながらも，一方では息苦しさ，抑圧された欲求不満を感じ，いらだっているのではないだろうか。こういう心理状態のもとではいじめはうさ晴らしの恰好の手段になるだろう。

第三部　いじめの克服に対する教育対策

われわれは第1部において，いじめの根源は現在の子ども達の育ち方，成長の仕方にあることを突きとめてきた。すなわち，うっぷん晴らしが最大の原因となってはいるが，目標も持たず，意志も弱く，正義感も磨かれず，マイホーム主義とわがままが目立ち，従って，個人的な好き嫌いで歯止めのきかないいじめに走るのも，うべなるかなとの感を抱いてきた。そして，もっとたくましく育てることが，解決の基本であると指摘してきた。

また，うっぷんの最大なものは，教科がむつかしいことであるが，先生の指導の仕方（例えば規則の指導など）や師弟間の信頼関係も，全体としては（学校毎に差があるが）十分でないことが浮かんできた。

家庭生活においては満足な状態にありながら，どうして，親をたたきたいと思い，家庭内暴力もやむを得ないと思うものが比較的多いのであろうか。それは，過保護から来る甘えや現在の親子関係に問題があるのではないかと指摘もしてきたが，第2部でそのことが理解出来るようになった。つまり，幼児期に過保護に育ってきたと想定される子どもたちが，成長するにつれて，親の過度の期待感から，命令的な，干渉的な指図を強く受け，そのためにうっぷんを内蔵して成長しつつあるということである。

以上のような理解に立って，その対策に及ぼうとするのであるが，それを次の観点から進めてみたい。

第1は戦後教育の反省を明確にして。戦後進められてきたわが国の教育は，真の民主主義教育から見て極めて未熟なものであったこと。それが，経済成長の代価と相俟って，今日のような子どもをつくってきたことを強く反省しているので。第2は社会の影響も考慮して。これは本論文の中心ではないが，社会的影響を無視して今日，教育は語れないからである。

一．戦後教育の反省

私が初めて，戦後教育の反省として，という副題の下に「教育における統御（コントロール）の意義とその方法について」を公にしたのは昭和45年（全国高等学校長協会誌第19号）。あれから16年目。再び強調しなければならないとは，歴史の流れが如何に大きいものであるかを物語る。

わが国は敗戦という形で民主主義を取り入れた。そして，マ元帥の占領第一号報告書には，「日本国民は如何なる形においても，民主主義の経験はない」とも述べられる程でもあった。従って，絶対主義下の教育の反動としても，また，民主主義の無理解からも，民主主義教育が正しく実践されなかったのも，やむを得なかったことと思われる。今，いじめ対策として再考されなければならないのは，収穫の刈り取りと代価の支払いと思われてならない。

このような立場に立って，次の二点を反省し，真の民主主義教育の足場としたい。

第一は人格形成の方向である。このことについては教基法第1条に，「真理と正義を愛し」ともあるし，「責任を重んじ」とも明示されている。しかし，その真理の内容は示されていない。結局，無理

解のままに，民主主義の本質は自主性であり，自己表現であるとして，外へ外へと自分を主張する方向に人間の形成が進められ，学習の主体は子どもであるとして，児童中心主義的傾向にも走って来た。昭和20年代の終り頃，ある自由主義教育の経験者と，

『こんなことばかりしていたら，今に先生の言うことも，親の言うことも聞かない子どもをつくってしまうようにならないか。』

と会話をもらしていたが，今そのことが現実化してきていることに驚かざるを得ない。

民主的人間は次の二つの調和の上に求められなければならない。すなわち，自由と規律，自由に行動する能力と強制に対する服従との調和である。権利と義務，（自己）主張と内省との調和と言ってもよい。

人間は本来自由を求める傾向があるので，幼少から自由にのみ慣れさせると，あらゆるものをそのために犠牲にしてしまうようになる。しかし，人間が社会生活をなしている以上，他人や社会との関係を考慮しなくては生きていけない。他人に迷惑をかけないこと，他人の権利によって自分が制肘されること，法の下に社会秩序を保って行かなければならないこと等々枚挙にいとまがない。法の強制に対する嫌悪なき服従，理性の命に対する従順な服従など，実に服従や従順は民主的社会にとって本質的なものであることは，西洋思想の源流としてのギリシャ精神も教えている。外へ外へと自分を主張することを中核としてきた未熟な民主主義を，この際どうしても真の民主主義へ取りもどさなければならない。

第二は教育における統御（control）の意義を徹底するようにしたい。コントロールとは動物的な自然状態に走る行為を矯め誘導し，強さを鍛えるための方法と解したい。個体は，人間は，このコントロールを欠いては成長できないものであることをどうしても徹底したい。

教育の方法としてコントロールは必須の条件に拘らず，戦後の教育は子ども本位という考えで，児童中心主義的な方向に走ったし，「生徒指導は児童の理解から」という名のもとに指導や鍛えは後退してきた。話し合いも強調され，その話し合いから内容を更に高めることが忘れられてきた。指導の本質はあくまで，内面のエネルギーを刺激してその能力を引き出すことと，欲望を善に誘導したり，強さを鍛えたりする統御（コントロール）との調和にあることを明確にして，真の教育が実践できるようにしたい。なお，第２部で明らかにされた両親の拒否的な過干渉的態度は，決して，ここに述べるコントロールとは異るので，このことも併せ含んで指導に当りたい。

二．具体的教育対策

ここでは次の三点から論究したい。

第１は学校教育改善のために

第２は家庭教育改善のために

第３は社会の影響を踏まえて

1．学校教育改善のために

ここでは教育内容と教育方法から考察したい。

(1) 教育内容には次のことを盛り込みたい。

イ．人類の鑑として生きた先人の伝記を取り入れて，共感や感動を呼び起し，大きな抱負をもって生き得るようにしたい。

例えば，細井平洲，上杉鷹山，中江藤樹，二宮尊徳，福沢諭吉等の生き方は，まことに人類の鑑と思う。また，すべての人には完璧は期せられないので，弱さや弱点はそれを味わいながら，学ぶべきものを学び取るようにすればよい。現在の話し合い中心の道徳教育では深さも高さも求められない。今の生徒の無目標性から強く感ずる。

ロ．素直さ，謙虚さ，服従といった内省的な徳を強調したい。

民主主義の道徳は，自分を表現し主張する面の徳（自己表現，主体性，自主性等）と，自分を顧みる内省的な徳（素直さ，謙虚さ，服従等）との調和に求められる。自由に行動する能力と強制に対する服従の調和と言ってもよい。驕慢やおごりが如何に自分や国政を誤り，謙虚や謙譲が如何に自らを高め善政の基本となってきたことか，先人の生き方や政治の本質を考察すればすぐ了解出来る。（従順や服従は権力者へのそれでなくて，自らの理性への服従，社会秩序の法への誠として）。今日の生徒が甘えや我儘の方向へ成長しているのを見て，真剣に反省せざるを得ない。

(2) 教育方法に関しては，特に次の三点を強調したい。イ．評価は個性に即して，ロ．勇敢にコントロールを，ハ．声なき声の理解を

「規則の指導に関する生徒の参加を」，「すべての生徒が自己実現のできる学級経営を」，等は自明のこととして，ここでは特に触れない。

イ．評価は個性に即して

今日のいじめの最大の原因は生徒のうっぷん。そして，そのうっぷんの最たるものは教科の理解が困難の上に，その成績がすぐに仲間に知られてしまうことにある。

このことから，学習指導に真剣に取り組まなければならないが，反面，評価に改善を加えなければならないことが痛感される。すなわち，「成績中心の評価」から「個性に即した評価」へ，である。

何故なら，今日の中学校教育の最大の問題は，能力不同の生徒に前期の中等教育を同じように施さなければならないようになっているからである。このことは中学校の教育に宿命的なものと思わざるを得ない。

従って，成績中心の評価ではどうしてもうっぷんの解消は出来ない。個性に即した評価をしなくては。個性の特色や長所を見て評価し，それを誉める。このための評価方法をどうしてもつくり上げる必要がある。

ロ．勇敢にコントロールを

私は，今日の最大の教育問題は，コントロール（統御）の意義を理解して，それを実践することにあるとさえ思っている。心身共にひ弱く育っている調査結果を見て。叱る時は叱り，誉める時は誉める。スポーツ，登山，遠足等はもちろん，寒稽古や夏稽古などの諸行事をたくさん設ける。負けることからの立ち上りを教えることま幼少期には絶対必要である。

なお，鍛えることは健康のもと，健康はつくり上げるものであることを徹底させたい。

ハ．声なき声の理解を

民主主義は自己表現であるとして自己表現を重視してきたが，いじめや自殺などに関しては生徒は言わない。また，発表を好まないタイプもあるし，下手なものは言わない。このために，事故の後，関係者は「そのようなことは全く知らなかった」ときまって言う。これは手遅れである。声なき声を聞いていないからでいる。

声なき声は表情や顔色で解る。そのためには絶えず接していなければならない。共学，共遊，共働ということは素晴しく思う。事故が発生してからではもう遅いのである。

緊要のこととして以上のことを述べたが，学校教育改善のためにはまだ幾つもある。頑張っていきたい。

2．家庭教育改善のために

子供達が健全に育つために家庭教育はどうあるべきか，次の4点を考えてみたい。

まず第1に，両親がともに愛情豊かであり，しっかりした生きる姿勢，価値観をもつことである。「この子はかけがえのない子どもだ」ということを子どもに充分わからせること，それは過保護ではなく，子供を信頼し，子供の自立を助ける姿勢である。

第2に，個人差，個性を生かした道が人生において一番幸せなことだと親自身が認識し，そのように子供を教育することである。学力だけの競争の世界に子供をおしやるのではなく，子供の興味や素質を生かせる道，それが将来，経済的自立につながる道を，親子でみいだしていく。そこに親が絶対の確信を抱いて，子供をみちびいていくことである。現代の親は，自分の信念が持てず，絶えず，まわりとの関係，平均された，みんなの方向ばかり気にして生きているとよくいわれる。協調も大切だが，自分は自分の道をいくという姿勢を親自身が持ち，それを子供に教育していくことが大切だと思う。

第3に，日常生活をきちんと処理していく能力を養うことが大切だと思う。家庭の中でできることはどんどん子供にさせる，時間，空間，お金，道具を自分で管理できるようにしつけることである。

第4に，核家族の世界からぬけ出るために，自分の家以外の経験をできるだけ多く持たせることである。キャンプや合宿もよいし，小学校時代からは親戚の家や友達の家へ遊びに行き，そこで寝泊りすることである。子供だけで他人の家庭へいくことにより，自分の家とは違った行動の仕方を学ぶだろうし，他人の眼からは，しつけの不備もよくわかり，注意もよくできるであろう。そうした家族同志のつき合いを広めることにより，親はわが子のみに眼をむけるのではなく，もう少し広い視野が持てるようになるのではないであろうか。

3．社会的影響に対して

今日ほど社会の非教育的な影響を多く受けていること，またとないと思う。その主なものは，営利主義のマスコミ，大人社会の道徳的堕落，工業化社会のもたらす緊張関係の増幅（競争社会のための緊張が続く），消費社会の影響，一人っ子の問題等数限りがない。一部教育評論家の事実に立たない扇動的な教育評論なども決して少ないとは言えない。これらの非教育的影響からどうして青少年を保護し，批判力へと発展させることができるであろうか。その対策などまことに至難というほかないが，

項目的に幾つかをあげてみたい。

(1) 自殺等の報道をめぐって，マスコミ内部にも慎重に対応しようとする動きが出始めたことは喜ばしい。更に要望したいことは客観的情報を提供して欲しいことである。一方的立場からの報道に対しては，抗議するくらいの勇気をお互いに持ちたいものである。つまり，一方的な報道は社会が許してくれないといった社会の良識を高めたいのである。

性的刺激に訴える出版物も追放したい。中学生・高校生が如何にそれに毒されているかの事例等でも出して，社会の啓蒙に努力することなども望まれる。

(2) 大人社会の非道徳的な行為に対しては，早くから批判力を育てるようにしたい。反対に，人間の感激的な行為，行動に対しては積極的に取り上げたい。

(3) 工業化社会の緊張からの解放については，遠足や登山，林間学校等によって浩然の気を養うようにしたい。

(4) 消費社会への対策については，欲望の個性化を提唱したい。欲望の無限化はますます子どもを悪くすることを強く銘記し，すべての欲望を満足するのでなくて，個性に合った欲望だけを満足させ，他はなくて済ます習慣である。

(5) 労働時間の短縮については，レジャーの質を高めて，労働力の向上に資する態度を忘れないようにしたい。勤労を厭う態度を絶対につけないことである。

(6) 一人っ子の問題については，学校教育の果す役割が大きい。横，縦のグループ構成を積極的にして，自然のうちに人間のあり方を体得出来るよう導きたい。家族間の交流が望まれることは前掲の通り。

社会の影響からの保護については，積極的に対処して，批判力を養い強さを鍛える方に是非転化させたい。教育者としては，このことが基本ではないであろうか。

む　す　び

はじめ，われわれはいじめについて殆んど無知であった。「いじめはどうして起るか」と問えば，誰もが，「それは複合的なものだ」と答えてくれるに過ぎなかった。意見を述べるについても，誰かが述べていることを，そのまま受けて話すよりほかはなかった。

しかし，今は違ってきた。いじめの根源は何か。何故，いじめが弱者に集団で歯止めが利かないように突走ってしまうのか。いじめの本質や性格といったものはいったい何なのか。うっぷんの原因となっている学校や家庭の問題点は何か。それに対して家庭や学校はどう当らなければならないか。社会的影響に対しては少なくともどのような決意を持ち対策を講じなければならないか。そのようなことについて一応の見識を持つことができるようになった。

また，大学でも，この資料を持って学内で盛大にシンポジュームを持つこともできた。現場の教育に生かすことができるようにもなっている。

以上の研究成果について，研究調査に御協力願った各中学校並びにご支援いただいた皆様に対して，また深甚な謝意を表したいと思う。

しかし，問題はこれで終わりをつげるものではない。それはまた端緒でもある。今後の精進を誓って結びとしたい。